
スプーンいっぱいの想い ~ Spoonfull Of Mind ~

よしき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スプーンいっぱい
の想い
〜 Spoonful Of Min
d

【Nコード】

N9399B

【作者名】

よしき

【あらすじ】

俺が助けた女の子。それは小さな小さな女の子。そんな子と毎日楽しく暮らしてます。そんな秘密のお話。

1つめ

スプーンいっぱいの想い
Spoonful of Mind

その1

友達と飲んだ帰り道。

酔っ払いついでに俺は一人の女の子を助けた。

と、言っても相手は痴漢や悪者ではなく、猫だ。

猫に追いかけられる彼女は足を引きずりながら逃げている。

俺が猫の後ろに空き缶を放り投げると、ビックリした猫は慌てて逃げてしまった。

しかし俺は酔いが回ってしまい、そこで足腰が立たなくなってストンと倒れてしまう。

「やべえゝ飲み過ぎだ、あはは…。」

なんて笑っていると、目の前で彼女が物凄い早口で僕に声をかけてきたのだ。

「あの、助けていただいてありがとうございます。」

「ん？いーよ、いーよ、そんな事。ひつく…」

俺はヘラヘラと笑い手を振る。

「あの、お礼がしたいんです。もしよかったら…」

「んな、お礼なんかいいって。マジで。」

俺は家に帰らなければ、と立ち上がる。

「じゃあ、俺帰る。君も気をつけて帰りなよ。」

「でもっ…あつ、私お役に…」

彼女の早口は加速度を増してゆき、もう何を言ってるのか分からない。

（人助けをしてちょっと気分いいなあ…。）

なんて気持ち良く帰った…んだと思う…。

正直なところ酔っ払っていて憶えていないのだ。

まあ、ここまでではよくあるような話だ。

「昨日は本当にありがとうございました。」

目が覚めると早口に深々と頭を下げるその子がいた。

正確にはベット脇のテーブルの上で正座をして。

…。

何でテーブルの上かって？

だって彼女の身長は5センチ位しかないんだ。

「サクラヒメと申します。昨日の御礼に弘樹さんのお役に立たせて頂きます。」

ニッコリと笑う彼女。

泥酔状態の俺は、自己紹介どころか、家に来てもいいと約束をしたらしい。

思わず俺もペコリと頭を下げる。

彼女は嬉しそうに手を叩いて喜んでいる。

そんなわけで今、そんな女の子と一緒に暮らしています。

< つづく >

2つめ

スプーンいっぱい
の想い

Spoonful of Mind

その2

「サクラ、ご飯できたぞ!。」

「はい。ちょっと待っててもらえますか?」

ボロアパートのキッチンから覗くとパソコンのキーボードがひとりでにキーを叩いているように見える。

身長5センチほどのサクラがキーボードの上を飛び回り、足でキーを叩いているのだ。

彼女はコロボックルとか言われる存在らしく、いわゆる小人だ。

その身体能力は驚くべきものがあり、力もありスピードも人間の何十倍も速い。

だから片足を怪我していても、キーボードの上を跳ね回るくらいな
んてことはないのだ。

しゃべるスピードも速く、慣れないと「ルルル…。」と虫の声のよ
うにしか聞こえない時もある。

サクラがここにきて1週間。

怪我をしているにもかかわらず「何かお役に立てる事はないですか
?」と言ってくる。

そんな彼女の気をそらすかのようにパソコンの使い方を教えると、
みるみるのめり込んでいった。

マウスは大きすぎて動かせなかったのでトラックボールを買ってく
ると、瞬く間に上達していく。

今ではインターネットで日記を書いたりもしている。

時々俺も日記を書くのだが、これが交換日記みたいで面白いのだ。

しかし、書いている途中で文章を読まれるのが恥ずかしいらしく、
俺はパソコンの前から追い出されてしまう。

どうせ後で読むのに、と思いつつも、その時間も結構楽しい。

ま、肝心の内容といえば、ご飯が美味しかったとか、近所の鳥と仲
良くなった、なんて子供の日記みたいだ。

「よし、出来ました!」

「じゃあ、もう読んで良いかな？」

「う…はい…」

やはり読まれるのが恥ずかしらしく、逃げるようにご飯を食べに行ってしまう。

行儀悪いけど俺はご飯を食べながら日記のページを開く。

怪我したところがだんだん良くなってきた事。

日記を書くのがもう4回目だった事。

俺の作るご飯がいつも美味しい、なんて事。

そして最後に一言。

「やっぱり弘樹さんのお役に立ちたいです。」

その一言は、やはり嬉しくて。

そして俺なりに思うところがあつて。

だからそのまま自分の日記を書き始めた。

その内容は恥ずかしくてここでは書けないけれど、大体こんな感じ。

「何もしなくても。

形のならないものをもらっている。

サクラがいてくれる事が嬉しいよ。

だから、楽しい毎日をありがとう、サクラ。」

って。

P S ・その日記サイトのu r lはここでは書けません。僕達の秘密にさせておいて下さい。

< つづ >

おしまい

スプーンいっぱいの想い
Spoonful of Mind

その3

カシャン！

遠くで金属が落ちる音を聞いた。

フォークかスプーンみたいな物が落ちた音。

それはどこか、悲しげな壊れてしまふかのような音だ。

体調が悪くて弱気になっているのだと思いたかった。

でも…。

こんな事なら言っておけば良かったな。

サクラに「ごめん」って…。

「私、帰りませんから。」

「別に二度と来るなって言ってるんじゃないよ。家族とか村の人が心配してるんじゃないかって…。」

「私がお役に立てないからですか？」

「いや…そうじゃなくて。」

「私、お邪魔なんです…。」

「そんな事思ってない！」

「…じゃあ、私の事…嫌いになっちゃったんですか…。」

サクラはめそめそと泣き出してしまふ。

言葉を重ねても埒があかない。

長い事ここにいるし、足の具合も善くなってきたので一度村に顔を出したらどうか、という提案をしたただけだ。

しかしサクラは強情に、弘樹さんのお役に立つまでは村には帰らない、の一点張り。

朝からずっと平行線のままだ。

「じゃあ、勝手にしろ！」

そう言い捨てて家を出てきてしまった。

サクラとは良い友達関係だと思っていた。

でも時々こうして分かり合えない事もあるのだ。

少し早いけど仕事場いって、頭冷やさないダメだな…。

とりあえず駅に向かい電車を待つ。

少し離れたところで外人が何か言っているのが見えた。

話し掛けられた方はしどろもどろに答えている。

やがて何かを聞き出せたのか、外人さんはその人の手を握り大声で
お礼を言っている。

本人は目を白黒させている。

あれは俺でもビックリするよな…。

（サクラも、あんな気分なんだろうか…。）

独自の文化で隠れるように生きてきたコロボツクル。

それがいきなり異世界で家に帰れなくなってしまう。

きつと心細かったに違いない。

それに風習とか仕来たりみたいなのがあって、あんな事言っただのか
もしれない。

一緒にいて俺は知っている。

サクラは嘘を言わないし、自分の心にも嘘をつかない。

俺はそんな事を考えずに優しさを押し売りしてただけなんだ…。

（帰ったら…謝らなきゃな…。）

そう思い見上げた空は雨を降らせていた。

傘も何も持っていなかった俺は案の定風邪を引く羽目になった。

帰り道、冷え切った体は自分でもまずいと思っていた。

冷たい雨がドンドン体温を奪う。

家に帰る頃にはもうフラフラだった。

（あんな事言っただけがあたったかな…。）

そう思いベットに倒れこんだ所までしか覚えていらなかった。

目が覚めると顔の脇にスプーンが落ちている。

そしてそれを抱えるように眠るサクラ。

なるべく静かに体を起こす。

睡眠のお陰で何とか体は動かせそうだ。

部屋は電気が点きっぱなしで、濡れた服が散乱している。

ヤレヤレと、薬を飲もうと静かに立ち上がる。

と、パソコンの電源が入ったままだ。

ふとその画面に目がとまる。

「具合が悪いときの処置の仕方」

そんな感じのサイトが開かれている。

「熱が出たとき」「風邪をひいたとき」などが詳しく書いてある。

もしかして、等と思う余地もない。

サクラは僕の為にこれを検索して探し出してくれたんだ。

「水分補給が大事です。」

これを見たサクラは5センチにも満たない小さな体で、倍以上はあるかというティースプーンで水を運んでくれたんじゃないのか？

それも何度も運んでくれたんだ。

こぼれた水がカーペットに線を描くほどに何度も、何度も…。

薬を飲んだ俺はベットに戻る。

静かに眠るサクラと俺の間に小さなスプーンがある。

銀色のスプーン。

それを持つ人を幸せにしていると言われる。

でも本当はスプーンは人を幸せにしたりしない。

そんなもので人間の幸せはやってきたりしない。

僕は目の前の小さな、小さな女の子を見つめる。

本当は、スプーンを使う人が幸せにしてくれるんだ。

そんな人が誰にだっているのかもしれない。

俺には…。

君がいた。

サクラがいてくれて良かった。

本当に…。

だから、ありがとう。

ふいに目頭が熱くなるのを抑え切れなかった。

「…ありがとう…サクラ…。」

スプーンいっぱいのが想いが嬉しくて、俺は泣いた。

俺と一緒にいるのは、そんな素敵な小人の女の子です。

<おしまい>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9399b/>

スプーンいっぱいの想い ~ Spoonfull Of Mind ~

2010年10月14日14時57分発行